



学校で学ぶ 男女共同参画



学校では、男女共同参画について、どのように学んでいるのでしょうか。芦屋市立精道中学校で家庭科を担当されている辻先生に、工夫を凝らした授業について伺いました。

精道中学校 技術家庭科教員
辻 美里 先生



こんな風に
授業を
しています！

■男女の「ちがいのちがい」カードを使って

辻先生は、道德の時間で、男女の違いについて、カード（下記参照）を使って意見交換をする機会をつくりました。カードには、「学校では男子は男子用トイレを、女子は女子用トイレを使う」「国会議員は圧倒的に男性が多く、女性は少ない」「両親は、妹には食事の片付けを言うが、兄には何も言わない」など、男女の違いについて考えたい事例が満載。生徒たちの議論の中から男女共同参画への理解を深めています。

「ちがいのちがい」カード

国会議員は、圧倒的に男性が多く女性が少ない。	学校では、男子は男子用トイレを、女子は女子用トイレを使う。
体育大会でのリレーは男子は200m、女子は100mを走る。	ランドセルは男子が黒色で、女子が赤色が多い。
A社では、男性を10名、女性を2名というように男女別に採用している。	女性の医師に対しては「女医」というが、男性の医師には「男医」とは言わない。
両親は、妹には食事の片付けを言いつけるが、兄には何も言わない。	200m 走で男子が女子に負けると笑われたが、女子は男子に負けても笑われなかった。
結婚すると妻は夫の姓に変わることが多い。夫が妻の姓に変わることが少ない。	Bさんの家では、必ず父親が最初にお風呂に入り、母親はいつも最後に入る。

■学校教育と同時に家庭での教育も

精道中学校の家庭科では、1年生は衣服や住居、2年生は食、3年生は保育について学習しています。衣服の時間で「ピンクは女性の色、青は男性」という声が聞こえたり、小さな子どもと触れ合う保育の時間では、主体は女子生徒、男子生徒は補助的な役割になることも多いそう。「学校で男女共同参画について学習し、子どもたちは頭ではわかっています。ただ自然に行動ができるかという点、まだまだ。家庭での習慣や考え方が影響しているかもしれません。例えば、お父さんが料理をするご家庭では、男子生徒も自然に料理をするようです。各ご家庭の影響は、やはり大きいですね」と辻先生

■この子どもたちが家庭を持てば・・・

データで男女の格差を示したところ、思った以上に大きな差に驚いた生徒が多かったそうです。例えば男女格差を示す「ジェンダーギャップ指数」で日本が過去最低の順位になったこと、また女性の就業率が出産

で低くなる「M字カーブ※」など、「なんとなく感じていたことが数値で突き付けられたことは、ちょっとした衝撃だったかもしれません」と辻先生。「こうした授業を受けた子どもたちが、家事をパートナーとシェアリングするのが当たり前という家庭をつくるようになれば、男女共同参画社会は大きく前進すると思います」と手ごたえを感じていました。

※M字カーブ：女性の労働力率を年齢階級別にグラフ化したとき、結婚・出産期の年代に一旦低下し、育児が落ち着いた時期に再び上昇をするという、いわゆるM字の形状を描くことをいう。

たくさんお話を
聞かせていただき
ありがとうございました！



芦屋市の教育現場データ

その①「教員総数に占める女性の割合」

芦屋市の学校（小学校8校、中学校3校）の教員の女性比率は、小学校63%、中学校44%で、平成29年度の全国平均（小学校62.2%、中学校43.1%）とほぼ同じです。

その②「教頭以上の職にある教員総数に占める女性の割合」

芦屋市の学校において、女性の校長は4人（小学校3人、中学校1人）、教頭は2人（小・中各1人）で、比率は小学校25%、中学校約33.3%で、平成29年度の全国平均（小学校22.0%、中学校9%）より高くなっています。

男女共同参画社会の実現を目指すための道のりは、大人だけの問題ではありません。未来を担う子どもたちにも、大切な課題です。

今回のウィザズ通信では、教育現場において、子どもたちが「男女共同参画」をどのように学んでいるのか調べてみました。



男女共同参画社会を学ぶ機会「進路の学習」

芦屋市内の中学校では、「進路の学習」という冊子を配り、将来を見据えた進路指導をしています。

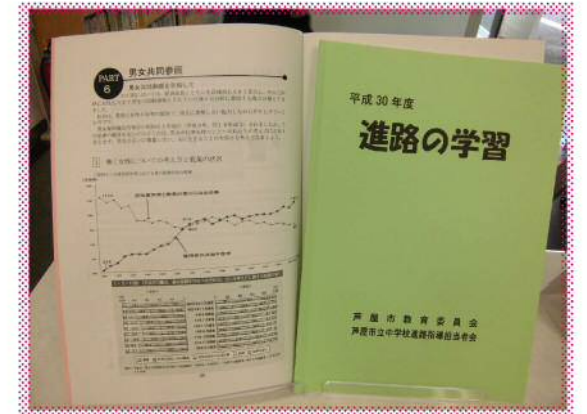
「進路の学習」は自分自身を見つめ、先輩の意見を聞き、自分の生き方を考えていく内容になっています。男女共同参画について学習する項目もあります。

男女共同参画の項目は「働く女性についての考え方と就業の状況」「働く女性を取り巻く環境」「性差の壁を越えて」「ワーク・ライフ・バランスを考える」の4つの段落に分かれています。

内閣府の資料や男女間賃金格差の国際比較のグラフなどを参考に、女性が子どもを産み育てながら、仕事を続けられる社会にするためにどのような課題があり、なにが必要か、生徒に考えさせる内容です。

また、男性の看護師と女性の瓦葺き職人の事例を紹介し、固定的な役割分担意識に基づく職業を、性差に関係なく多様な人材が働くことで、誰にとっても働きやすい環境になることを伝えています。

男女がともに職業を持ちながら、手を取り合って生きていく社会の実現に向けて、現状の問題点や改善点を学び、生徒が自分で考えながら、将来を模索することは大切です。



家庭科共修世代と別修世代の家事に対する意識の違い

「家庭科」が男女ともに必修となったのは1993年です。現在年齢が37歳以下であれば中学から男女とも共修しています。共修世代（37歳以下）と別修世代（38歳以上）の既婚男性の意識の違いを調べたデータがあります。家事に対する意識と実態に関するアンケート（2015年5月花王株式会社調べ）です。

	共修世代 N=389	別修世代 N=412	共修-別修 差異
リビングそうじ	69%	49%	+20
キッチンそうじ	61%	39%	+22
浴室そうじ	77%	68%	+9
トイレそうじ	61%	45%	+15
洗たく	64%	44%	+20
食事づくり	52%	43%	+9
食器洗い	74%	66%	+9

アンケート（2015年5月花王株式会社調べ）です。

家庭科共修世代の既婚男性は「家事をすることは家族の一員として当たり前」という意識が高く、「家事は『分担』ではなく、『シェア（共有）』するもの」と考えており、家事を実施しています。そうじ、洗たく、炊事の家事シェアリング率は別修世代よりも高く、妻が専業主婦であっても家事シェアリングが進んでいます。

このように、家庭科が男女共に必修になったことで、意識が進んだことがわかります。

最近、お茶の水女子大学がトランスジェンダーの学生を受け入れることを発表しました。世の中は多様性を認め合う社会を目指しています。家庭科共修と同じく、教育が社会を変えていくのは、決して遠い未来の話ではありません。

編集委員の
ひとこと



～約80年前の学校教育の思い出～

私は田舎の学校だったので、クラスは1つしかなく、男女とも同じ教室でしたが、「男女七歳にして席を同じゅうせず（意味：7歳にもなれば、男女の別を明らかにし、みだりになれ親しんではいけない）」ということわざがあるとおり、席は男女別でした。現在は家庭科も男女共修であり、今の教育を受けた世代のこれからの期待します。



戦時下の運動会（山手小学校）